三重宙返りの記

海野十三

僕は、このところ二三ヶ月、からだの工合がよくない。それでこの日、文壇（ぶんだん）航空会にも、残念ながら特殊飛行は断念して、辞退を申出ておいたのであった。殊（こと）に、その前々日は終日（しゅうじつ）家にいて床についていたし、その前日は、炬燵（こたつ）の中で終日、日米関係の本を読んでいた始末であった。だから当日は、ふらふらするからだを豊岡まで搬（はこ）んだようなわけで、特殊飛行をする意志は毛頭（もうとう）なかったのであった。

「海野さん。さあ、支度（したく）をなさい」

「僕は、今日は、乗りませんよ」

「そんなことはない。あんたが乗らないということは

ない。そんなことをいうと、皆、乗らないといい出すよ。さあ、支度を」

「僕は、からだが悪いので……」

「どこが、どうわるい」

「心臓やその他……機上で人事不省（じんじふせい）になるなんて、醜態（しゅうたい）ですからねえ」

「なあに、心臓なんか、大丈夫だ。こんな機会は二度とないから、乗りなさい」

　これは西原少佐殿と僕との押問答だ。これを傍で聞いている皆々は、愉快そうににやにや笑っているが、僕は笑い事ではない。

こんなことを数回くりかえした。

西原少佐殿は、熱心にくりかえし薦（すす）め、そして僕を元気づけてくれる。ここに於て、僕は秒前までの乗らないという決心をさらりと翻（ひるがえ）し、

「はい、乗りましょう」

といって、オーバーの釦（ボタン）に手をかけた。これが最初の宙返りであった。意志というか覚悟というか、それの宙返りであった。決意してしまえば、元々好きなことなんだから、とたんに、わがからだはもうふわっと空に浮んだようだった……。

機は約千五百メートルにとびあがった。

はるかな地上には煙霧が匐（は）い、夕陽はどんよりと光を失い、貯水池と川とだけが、硝子（ガラス）のように光っていた。と、突如、からだがぐーっと下に圧えられた。機は奇妙な呻（うな）りをたてはじめた。いよいよ始まった、宙返りが……。

　宙返りをしていることは、はっきり分っているくせに、「自分は今、本当に宙返りをやっているのかしら、夢を見ているのではないか」という疑念がしきりと湧いた。

　——そのとき、虚空（こくう）と大地とが、まるで扁平（へんぺい）な壁のように感じられた。空は湖のようだ。ぐうーと水平線

があがって、上から巨大なる島が下りてきた——と思ったら、それは島ではなく、わが地球であったのだ。芝居の背景が、ぐるぐるまわっているような感じでもあった。僕は、ひたすら錯覚（さっかく）の世界を追っていたのだ。はげしい横転の始まった瞬間には、僕の身体は、機外においてけぼりにされたように感じた。水平線が、きらきらと、交錯（こうさく）した水車の車軸のようにみえる。奇妙なことだ。

一等気持のわるかったのは、上昇反転であった。機はぐんぐん垂直に上昇していって、その頂上で、エンジンははたと停り、そして失速する。からだが、空中

にぴたりと停った。まるで空中に腰掛があって、その上に、ふわりと胡坐（あぐら）をかいたようなふしぎな気持だ。

そこまではいいが、とたんに、下腹を座席へ固くしめつけている筈（はず）の生命の帯皮（おびかわ）が俄（にわか）に緩（ゆる）み、からだが逆さになって、その緩んだ帯皮から、だらりとぶらさがる。機を放れて、単身（たんしん）墜落の感じだ。はっと目を前方に向け、そこにあるべきはずの地平線を探るんだが、地平線は無く、顔のまん前にあったのは、何ともいえない気味の悪い青黒い壁のような大地であった。いつの間にか機首を下にした機は、次の瞬間、どどっと奈落（ならく）に顚落（てんらく）する……。

特殊飛行中、僕は特に頭を下げて、自分のからだに、今如何なる苦痛が懸っているかを特に注意してみた。急上昇のときだと思うが、胸と太ももとが、目に見えない魔物のために、今にも押し潰されそうに痛むのを発見して、ああこれこそ我慢づよいわが空の勇士が、絶えず相手に闘っているところの見えざる敵〝慣性〟だなと悟った。

機が地上に下りると、僕は急に胸先がわるくなって、むかむかしてきた。生唾が、だらだらと出てきた。全身には、びっしょり汗をかいていた。だが僕は、大声で叫びたいほど愉快であった。

僕は、機上から下りて、校長閣下を始め御歴々（おれきれき）に対し、初めて挙手の礼をもって挨拶（あいさつ）をした。鼻汁がたれているのはわかっていたが、これを拭（ぬぐ）うすべをしらないほど平常の身嗜（みだしな）みに無関心だった。

西原少佐殿は、さっきとは打ってかわり、それからいくどもくりかえし、

「海野さん、まだ胸がわるいか。まだ、なおらんか」

と、電車の中までも、いたわってくれた。

はっきり書くと、その夜八時半ごろになって、この胸のわるさは、やっと癒（なお）った。と同時に、ここ数ケ月の気分の悪さが、一ぺんに吹きとんでしまった感じが

した。決行するとは全然予期しなかった特殊飛行は、僕の病気までを宙返らせた。最悪の状況下にある自分のからだを駆って、よくも宙返りに耐えたということは、私事ながら、実に大きな収穫であった。病気のときは、進んで特殊飛行を志願することにしたい。但しそう思ったのは、まるで生れかわったように元気になった翌日のことではあったが……。

底本：「海野十三全集　別巻1　評論・ノンフィクション」三一書房
1991（平成3）年10月15日第1版第1刷発行
初出：「航空朝日」朝日新聞東京本社
1940（昭和15）年4月号
入力：田中哲郎
校正：土屋隆
2005年6月14日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。